

## 『串木野金山』の思い出

吉川 恵 章<sup>1)</sup>

かつてこの金山に勤務し三井金属鉱業(株)に長く勤務した私としては、串木野金山に対する愛着と思い出は甚だ多いが、私が勤務した昭和28年～33年の5年間の中で見たり聞いたり、また、実感した串木野に住む方々の考え方、言葉(鹿児島弁)、当時の上司、同僚、部下の事、宴会などで良く利用した料理屋の方々、買物などに利用させて貰った商家の人々等の記憶は鮮やかに蘇り忘れる事は出来ない。

串木野金山は、かつては日本一の産金量を誇る世界でも有数の金山でジパング・ゴールドと称され、世界の憧れのゴールド日本の一翼を担ったものであったと言われる。徳川時代から我が国では佐渡金山等と共に幕府が最も重要視した金山地帯でもあった。当時の薩摩藩主であった島津家の支配下にあり、各所で高品位金鉱が狸掘りされていた事は想像に難くない。但し採掘技術は低く、製煉加工技術に至っては皆無に近かったと思われ、大規模採掘並びにシアン化合物を使用しての青化製煉は、明治末期に三井鉱山合名会社が鉱区を買収してからの事である。

昭和の初期、当時の三井鉱山(株)は石炭価格の低迷などで経営困難になったとの事であるが、串木野金山の金産出量は莫大で、経営に寄与する事大きく三井鉱山を救済したという話も聞いたことがある。鉱脈の何処を採掘したのかの記録は見当たらなかったが、私の推定では多分、この鉱山最大の串木野一号鍾の中央富鉱部(幅60mの所)西山集落付近の地下を採掘したと思う。恐らくこの部分の品位は数十g/t以上であったと思う。現在、住友の菱刈金山の品位は世界最高と言われ、数十

g/tであるが、ほぼこれに匹敵する品位での採掘が行われていたと私は推定している。

鉱脈の数は甚だ多く、三井が直接採掘していた主脈のある一坑の南側に位置する二坑と呼んだ地域は、全て鉱区を貸して租鉱権で採掘させていたので、自稼山と称する20以上の租鉱権者が居た。一坑の採掘品位は昭和初期の富鉱部採掘などにより高品位の部分には殆ど採掘済みであり、産出鉱品位はせいぜい3～4g/tが限度で自稼山からの買鉱により何とか操業予算の6g/t程度の品位を維持していた。

三井鉱区内の二十数本の鉱脈以外にも北西側に日本鉱業(株)の荒川鉱山、南東側に個人の所有する日置鉱山などがあり、さらに鹿児島県の中には山ヶ野、大口、岩戸、喜入、春日などに小規模採掘権者が居り、売鉱の申し込みは甚だ多かった。荒川鉱山は末期には鉱量不足となり自山鉱としての採掘は昭和40年代に終わり、合同資源産業(株)(元磯部鉱業)に租鉱して貰い、鉱石は三井串木野が引き取る事となり、六番坑(海拔-120m位)で坑道を開削して坑道を繋げ鉱石を引き取った。

その後、日本鉱業は鉱区全体を三井金属に売る事に同意し、合同資源が租鉱した鉱石を三井串木野が買う形になった。荒川から串木野に繋がる坑道の間接に荒川二号鍾と称する高品位脈(10g/t程度)が発見され、埋蔵鉱量10万トン程度あり串木野鉱山の延命に数年貢献した。

しかし、串木野鉱山は前述の如く昭和の初期に主要脈である串木野一号鍾の高品位部は採掘済みであり、私が探査を引き受けた時はそれまでの乱掘りにより、鉱石品位は極めて低く、お粗末な事ではあるが鉱山には埋蔵鉱量計算書はなく(当時は埋

1) 三井金属鉱業株式会社 名誉顧問

キーワード: 串木野鉱山, 荒川鉱山

蔵鉱量計算書のある鉱山は少なかつたと思う)、赴任直後から半年かかって計算したら確か3.5g/t程度であり、操業予算品位5.5～6.0g/tを維持する事は困難であると所長に進言し、買鉱に力を入れたことは今も忘れない。

荒れた掘場を担当した採鉱技師の苦勞は絶大であり、さりとて高品位鉱脈は発見できず、地質屋の私も追い詰められていた。幸い赴任2年後位に、串木野一号鍾の南に串木野二号鍾と称する高品位鉱脈(10g/t程度)を発見できたが、掘場は40℃を超える高温で、作業員は塩を舐めなめ頑張つて労働した。

変わった採掘として、串木野一号鍾の中央富鉱部の採掘跡に充填された昔の研石は10g/t程度の品位があり、コストの掛かるスクエアセット法(坑木で長方形の枠組を作りながら水平、上方へ掘り進む方法)で採掘しても採算は合った。その後、鉱山は細々と操業を続け、確か昭和55年金価格は4,500円/g程度に高騰した時は大きな利益が出て現地での役員会を盛大に催した記憶があるが、これを最後に価格は1,000円/g位の低迷を続け、近頃は採掘を中止している。一方で青化製煉工場は、金銀のリサイクル工場として活躍している。鉱山の一部は観光鉱山として盛況を見たが、最近では収支償わず閉園となった。鉱山には必ず寿命があるとの一例だ。

さて、話題を代えて薩摩の印象を述べたい。薩摩に住む人々は、それは誠に素直な方々であり、薩摩隼人と言われ、西郷さんや数多くの明治維新に貢献した人材を輩出した土地柄である。仁義に厚く礼儀正しく国の為には命を捧げる精神の人が多くなった。そして気候温暖で南国特有の朗らかさを備えている。首都東京から遠く離れ、当時交通は鉄道のみで東京までは二十数時間を要し、異国に居る感もあり5年間勤務して上京したのは出張による数回で、自費では金も無く上京した事は無かつた。正月は串木野で迎え、従つて土地の方々とは極めて親しい関係になっていった様に思う。

食べ物としては薩摩芋(現地ではカライモと言う)が有名で、これから作られる芋焼酎は全国的に知られている。昭和28年頃の焼酎は精製が悪く匂いが強く飲み辛い酒であつたが、毎日飲まされている内に段々慣れ、美味しい酒となつていった。現

在は精製法も良くなり各種の焼酎が出回っているが、やはり元祖は薩摩の芋焼酎であろう。

忘れられないのは桜島火山である。鹿児島市へ稀に汽車またはバスで1時間位かかると、大空に常時煙を吐いている桜島がそびえている。薩摩の象徴だけの事はあり、錦江湾の奥に浮かぶ姿は見事な景観である。錦江湾はカルデラ湖にて鹿児島湾全体が幾つかのカルデラの集合体と思われ、波静かにて水産資源に恵まれ、古来より南蛮貿易で栄えた土地柄である。琉球との交易も盛んであつたと思われ、踊りとか言葉のイントネーションにも琉球の影響は絶大だ。

それと桜島火山の影響は毎日吹き上げている噴煙が時々大量になることで、現地では常識だが、天から降って来る火山灰は本当に厄介な物で、シラスと称する堆積した土により車は汚れる、道路はぬかるむで現地では対策に困惑していた。その後どうなつたか知らないが近代土木技術の進歩で改良されていると思う。

話が凡そ学術から遠く逸れてしまつたが、北薩・串木野広域調査の最大の成果は菱刈金山の発見で、官民一体となつて調査した結果である。地表に露頭のない潜頭鉱床であり、このような発見の可能性は今後も無しとしない。地下数百メートルの鉱床発見は各種の技術が開発されている現在でも困難な事業の一つであり、官民一体とか各企業の合弁とか知恵を働かせ新しい発想で資源開発を進めて行くのが良いのでは無いか。対象地域は何も国内に限つた事ではない、ODAなどの予算をもっと活用し、我が国には殆ど無くなつた地下資源の開発調査を海外で実施されんことを望む。特にODA予算は私の目から見れば無駄遣いが多く、相手から感謝もされてない例もあると聞く。経済産業省、文部科学省辺りが民間と協力して、新しい発想のもと我が国の経済発展に欠かせない基礎素材としてのベースメタル資源の開発を切に期待して、この思い出記を閉じる。

YOSHIKAWA Sigeaki (2004) : Memories of "the Kushikino gold mine" in Kagoshima pref., Japan.

<受付:2004年7月12日>